

身近な地域からの農業理解 —宮崎の農業から世界が見える—

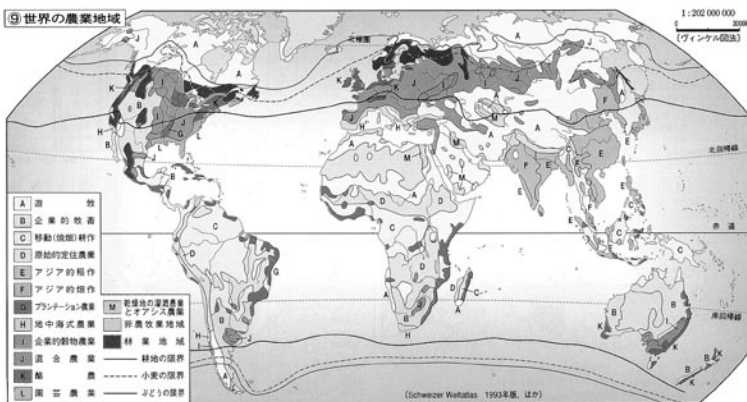
宮崎鵬翔中学高等学校 緒方 浩朗

1. はじめに

本校は普通課程を履修する「英数科」において地理Bを高2で4単位、高3で4単位選択科目として履修している。大学進学を主目的とする本学科においてはどうしても受験対策中心の授業形態にならざるを得ないが、最近マスコミ等でも報道された通り学生・生徒の「地理離れ」は教育現場教員にとっても深刻な問題であり（イギリスを中心とした世界地図上でアメリカ合衆国の位置を問うたところ中国を指し示した高校生大学生が多数いたという！）、教科書をなぞるだけではなく、生徒の興味を喚起する授業実践の工夫が求められるところである。今回テーマとして取り上げる農業単元は最も身近な「食」に直結するものであり、生徒の関心も高く地理Bの各単元の中では比較的生徒の取り組みやすい単元であるといえる。

2. 世界の農業の分布について学ぶ

帝国書院「新詳地理B 最新版」ではまず第2章「資源と産業」の冒頭からいきなり農業地域区分に入るのではなく、ワンクッション置いた第1節「産業の発達と変化」というタイトルで農業単元の導入が設定しており、同単元の概要を簡潔な文章と鮮明なカラー写真等で紹介している。メイン



世界の農業地域「新詳高等地図 最新版」p.114

となる農業地域区分は第2節「農産物の生産と流通」から本格的な履修となる。

地理を選択する生徒自身が元々自然や農業に関する興味が旺盛で予備知識もあることから、世界の各地域の農業のあり方が「自然条件」に大きく左右されることについては、教科書p.70の作物の栽培限界のカラー地図等を利用して比較的スムーズに問い掛け形式で授業は進行する。が、第2の柱である「社会条件」の単元にさしかかると関連する諸条件が複雑に錯綜し、系統的に取り扱おうとすればするほど生徒の興味も減衰気味となる。しかし教科書本文の記述にもあるとおり、産業としての農業が各地域で最も利益の上がる農作物を選択する以上、現代の農業においては自然条件よりもむしろ社会条件が重要な成立条件になってきていることを、適切な凡例やエピソードを駆使しつつ確実に伝えていかなければならない。

3. 世界の中の宮崎の農業

本校が所在する宮崎市は宮崎平野の中心であり、教科書等でも紹介されているような特色ある農業を展開している。冬季でも滅多に降雪の見られない温暖な気候と年間を通した日照時間の長さを生かし、ビニールハウス等を利用した施設園芸が盛んである。これは元々早期水稲栽培の裏作として始まったものであるが、現在では宮崎県の農業を代表するものとして全国的にも有名である。おもな栽培作物はきゅうりやピーマンなどの夏野菜であり、これらは全国的に品薄(取引価格高)になる冬季を中心に出荷されている。

戦後の高度経済成長に伴い都市部を中心に野菜類の需要が伸び、また化学工業等の発達により園芸農業関

連の農業資材が豊富に供給される状況の中で、全国的にも先鞭をつけた宮崎平野における野菜の促成栽培もその後競合する地域が増えて、先行者利益の効果が薄れてきた。そのため本地域の農業自体も「多角化」を基軸とした構造改善を迫られ、前述の基幹作物に加え、より高付加価値のメロン・苺・花卉類への転換も顕著となり、また果樹作物の温室ミカンや日向夏ミカン、また温室マンゴー等の農産物の全国的なブランド化をめざしている。

もう一つの本地域の農業の特色は、平野部における早期水稻栽培である。かつては県南部において二期作も行われていたが、宮崎県は例年秋は台風の進路にあたり、甚大な被害を被っていたため、それを回避するために1960年代に本格的に早期水稻の導入が進められた。現在は作付面積も逆転し市場価格の高い早期水稻が主流である。

これらのいわゆる「宮崎産超早場米コシヒカリ」は7月下旬には出荷が開始され、全国で最も早い新米として市場での人気も高い。

4. なぜきゅうり・ピーマン・トマトなのか？

農業地域形成において、マクロな視点でみるならば前述のホイットルセイ原図の農業地域区分図をみても明白なように、やはりそれぞれの地域の自然条件によって農業の在り方が決定されることが前提であるけれども、農業自体が市場経済に組み込まれ、より商業化、企業化が進行する中で農業の形態に占める「社会条件」のウェイトは以前とは比較にならないくらい大きくなってきている。

広大な沖積平野が分布し、日照時間も全国有数で、降水量も平均で年2500mm前後と稲作には最適の条件を備えた宮崎平野において、元々は稲作の裏作として始まった園芸農業が今や地域の農業経済を支える柱となっている。

栽培作物の中心となるきゅうり・ピーマン・トマト等の共通点は何か。まずこの問いかけをもって同単元の導入とする。まずこれらは夏野菜であること、温暖な宮崎では気温的には早くも5月半ばからもう夏であるが、さらにビニールハウス等の農業施設を利用して人工的な夏の状態を作り出し

ていること。出荷のピークが取引価格の高騰する冬季に集中することから、今や促成栽培と抑制栽培の分類があまり意味をなさなくなっている（半年ずらせば早いも遅いもなくなる）。

もう一つの共通点は「果菜」野菜、いわゆる「実」の野菜であることだ。宮崎はおもな市場である京阪神方面から遠く、大きな地理的ハンデを負っている。「葉物」野菜では通常の輸送手段では消費者に届くまでに大都市の近郊農業地帯に1～2日のハンデを負い、かといって別的高速輸送手段を利用すれば輸送コストがかさみ価格的に太刀打ちできない。「果菜」野菜であれば鮮度落ちが「葉物」に比べ緩やかで商品価値の低下を最小限に押さえられる。また「根菜類」では気候的なメリットを生かせない。結局、「果菜夏野菜」が最も収益性の高い農産物ということに落ち着く。

早期水稻についても、前述の通り台風の襲来前に収穫を終えてしまうという元々の導入理由よりむしろ「日本一早い新米コシヒカリ」という高い商品性が大きなインパクトをもって市場に受け入れられている。食味の点では普通作との比較でいろいろな意見もあるが、日本人に共通した初物信仰から新米をことのほかありがたがる風潮の中で市場でも人気が高い。

5. おわりに

以上のように生徒の認識も高い地元の農業形態を題材に農業の「社会条件」についての授業を展開している。現行教育課程となり教科書自体が資料集化し、図録等も大判で鮮やかなカラーのものが掲載されるようになり、編集される出版社側が従来の準拠資料集との差別化に苦労されることを心配するほどである。いずれにせよ教科の特性上、視覚的な教材の充実は歓迎すべきことであり、本校では教科書に加え、教科書準拠の「新詳地理B資料集」を採用し、また最後に隠れた(?)教材として「帝国書院版 社会科県学習用 宮崎県をしらべよう」を利用している。本来中学校用の教材だが県別分冊になっており、県別の地誌が要領良くまとめられてあり、価格も安く、お勧めである。